

寿福寺への御状

文永五年一〇月一日 四七歳

風聞の如くんば、蒙古国かんちようの簡牒、去ぬる正月十八日たし慥かに到来し候ひ畢んぬ。然れば先年日蓮が勸へし書しんの立正安国論の如く普合ふごうせしむ。恐らくは日蓮は未萌みぼうを知る者なるか。

之を以て之を案あんずるに、念仏・真言・禅・律等の悪法一天に充滿して上下の師となるの故に、此くの如き他国侵逼しんびつの難起これるなり。法華不信の失に依りて皆一同に後生は無間地獄むけんに墮すべし。早く邪見ひるがえを翻し、達磨だるまの法を捨て、一乗正法に帰せしむべし。

然る間方々へ披露せしめ候の処なり。早々一処に集まりて御評議有るべく候くわ。委しくは対決の時を期す。恐々謹言。

文永五年戊辰十月十一日

日蓮花押

謹上 寿福寺侍司御中